

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

「英語科教育法」における模擬授業の指導 : Oral Introductionの実践

著者	小菅 和也
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	6
ページ	55-63
発行年	2019-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001054/

「英語科教育法」における模擬授業の指導

— Oral Introduction の実践 —

Micro-Teaching in the Course of English Language Teaching Methodology

小 菅 和 也^{*}
KOSUGE Kazuya

1. 本稿の目的

小菅（2017）において、日本の中学校・高等学校における、Oral Introduction を核とした英語授業の展開について論じた。本稿では、英語教員（あるいは英語教員免許取得）を目指す、本学児童教育学科の学生に、「英語科教育法」での模擬授業を通して、Oral Introduction の考え方をいかに理解させるか、また、その背景にある英語授業の考え方をいかに伝えるか、さらに、それに伴う課題について、これまでの実践を踏まえて論じたい。

2. 「英語科教育法」における模擬授業（micro-teaching）の実際

2.1 模擬授業の位置づけ

児童教育学科において、英語科指導に関する科目としては、2 年次前期に「英語科指導法 A」、後期に「英語科指導法 B」、3 年次前期に「英語科教育法 A」、後期に「英語科教育法 B」が設置されている。

筆者が担当する科目のうち、2 年次後期の「英語科指導法 B」では、日本の英語教育の諸問題、英語授業の諸問題を、履修者によるディスカッションも取り入れて論ずる。これを踏まえ、模擬授業として、指導過程のうち、新教材導入の部分に焦点を当て、中学校 1 年生レベルの言語材料中心（structure-centered）の Oral Introduction を体験させている。3 年次の「英語科教育法 A」「英語科教育法 B」では、題材内容中心（story-centered）の Oral Introduction を模擬授業（micro-teaching）として、履修者に体験させている。なお、Oral Introduction の考え方や実際については、小菅（2017）を参照されたい。

2.2 模擬授業のねらい — Oral Introduction による指導の体験

履修者である多くの学生が、中学校・高等学校では、日本語による解説主体の英語授業を受けてきた経験を持つ。「英語科教育法」では、そこから脱却し、基本的に英語で進める英語の授業（Oral

^{*} 武蔵野大学教育学部

Introduction を核とする授業)を、教師の立場で体験し、指導技術を身につけ、自己の英語知識・運用力を再確認する。ひいては、「ことばを学ぶ・教える」ことの意味や意義を改めて考える機会とすることをねらいとしている。

2.3 模擬授業の教材

「英語科教育法」では、題材内容中心の Oral Introduction について、履修者全員に教師役を体験させることを基本とする。そのため、教材は、あえて検定教科書ではなく、話の流れがわかりやすい、20～30語程度で2～4文程度の英文からなる、中学校2,3年生レベルの教材を「新教材」として多数用意する。それぞれ、新出文法事項は含まないが、導入すべき2～4の新出語句を含むものとする。

以下、教材の実例を挙げる。下線部が新出語句という想定である。4例のうち、(1)(2)は、言わば「お話」(fictional)で、このタイプは、前期の「英語科教育法A」で扱い、後期の「英語科教育法B」では、(3)(4)のような事実に基づいた内容(factual)を扱う。

なお、(1)(2)は、L.A.Hill.(1980). *Intermediate Steps to Understanding*. Oxford University Press に掲載されたショートストーリーの一部を書き直したものである。(3)(4)は筆者の自作である。

- (1) Jimmy was playing near the river. He kicked a stone and his shoe came off. The shoe landed in the water.
- (2) Jane woke up at midnight. She saw something white in the garden. It was moving towards the house. She was frightened.
- (3) The Titanic was a very large ship. On its first voyage in 1912, it collided with a big iceberg.
- (4) Croissant is a French word that means crescent. But the bread called croissant was born in Austria.

2.4 模擬授業の運営

2.4.1 履修者による模擬授業の準備

履修者を、基本的にペア(履修者数が多い場合は、3,4名のグループ)に分け、それぞれに上記のような教材をひとつずつ与える。教材は互いに独立しており、ある教材が別の教材の続きになっている、というようなことはない。各ペア(あるいはグループ)に、模擬授業準備のための、スクリプト用紙と板書計画用紙を配布する。これらは模擬授業の際に提出させる。準備には、少なくとも2週間程度の時間的余裕を与える。

教師役の学生には、以下のようなことが求められる。

- （１）英文全体を生徒（授業者以外の他の履修者はすべて生徒役）に理解させ、生徒が言えるようになるまで指導する
- （２）指導の中で日本語は用いない。新出語句も日本語訳を用いずに理解させる。生徒の理解を促進するため、視覚補助（ピクチャーカード、写真など）を必ず用意する。
- （３）生徒との英語によるやりとりをできるだけ多く行う。教師の一人芝居になってはいけない。
- （４）台本は見ない。

2.4.2 履修者による模擬授業

授業の流れは、およそ以下の通りである。

（１）教師役による模擬授業

ペア（またはグループ）のひとりが教師役となり、他の履修者全員が生徒役となる。模擬授業は導入部分のみで、所要時間は５～１０分程度である。指導教師は、教室の後ろから、授業者の動きや板書を中心にビデオに録画する。

（２）コメントシート記入

模擬授業終了後、板書はそのまま残しておく。生徒役全員に「コメントシート」（Ａ５判）を記入させる。コメントシートには、模擬授業の「良かった点」「改善すべき点」の両方を必ず記入する。３分程度で回収する。

（３）授業者によるふりかえり・生徒役からのコメント紹介・指導教師からのコメント

まず、授業者本人から、工夫した点、反省点、気づいた点などを簡単に報告してもらう。指導教師が、生徒役からのコメントをざっと紹介し、さらに指導教師が気づいた点を指摘する。指摘のポイントは、3.1に述べるチェックリストを参照されたい。

以上を１サイクルとして、ひとつの模擬授業に約２０分を要する。したがって、１コマ９０分の中で４つの模擬授業を行うのが限度である。数コマを利用して、すべてのペア（またはグループ）の模擬授業を行う。

2.4.3 ビデオ視聴によるふりかえり

全ペア（グループ）の模擬授業が一通り終わると、次の授業では、指導教師が撮影した授業映像を履修者全員で視聴する。履修者全員が授業を客観的に見直す貴重な機会である。特に教師役の学生は、生徒たちから自分がどう見えていたかという視点で見直すことができる。それによって、自ら新たに気づく点も多々ある。また、指導教師の立場からは、模擬授業の最中や直後には触れることができなかった、授業者の文法や発音等の誤りや問題点を指摘する機会となる。ビデオ映像による反省会は、一般財団法人語学教育研究所の、第５研究グループによる、「授業研究」の手法をヒントにしたものである。なお、教師役の学生は、生徒役からのコメントシート、ビデオ視聴をふまえて、ある程度詳細なふりかえりシートを作成して後日提出する。ここまです「第１ラウンド」と呼んでいる。

第1ラウンドでの反省をもとに、各ペアのもうひとり(あるいは各グループの別のメンバー)が、同一の教材を用いて、「改善版」の模擬授業を行う。これも第1ラウンドと同様に進め、ビデオ視聴による反省会までを行う。これを「第2ラウンド」とよんでいる。

3. 模擬授業に見られる授業者の課題

ここでは、模擬授業から見えてくる、授業者のさまざまな問題点を論ずる。

3.1 Oral Introduction のチェックリスト試案

授業者の教授行動をチェックするために、以下のようなチェックリストを作成した。小菅(2010)での提案を基本として、徐々に修正を加えてきた。模擬授業を観察する上で、ポイントとなる項目を整理して列挙したものである。各項目について評価する、といったことは、実用性の観点から現時点では考えていない。将来的には、積極的な活用の可能性はあると考えている。内容的に項目の重複が見られるところもあり、今後さらに改訂が必要である。履修者には、第1ラウンドのビデオ視聴による反省会の段階で配布している。

オーラル・イントロダクション チェックリスト ver. 3.2

0. 大前提

- 0-1 教師が教材を正しく理解しているか
- 0-2 生徒が教材を正しく理解できたか

1. 授業組み立ての原則(心得五ヶ条)

- 1-1 音声から文字へ
- 1-2 理解から発表へ(Input から Output へ)
- 1-3 概要から詳細へ
- 1-4 教師の指導から生徒の活動へ
- 1-5 全体から個人へ、そしてまた全体へ

2. 英語の正確さ

- 2-1 教材として提示する英語
- 2-2 教室英語(指示の英語)
- 2-3 発音・アクセントの明らかな誤り
- 2-4 板書のつづり
- 2-5 英語の適切さ

3. 板書の見やすさ・わかりやすさ

- 3－1 絵の大きさ
- 3－2 文字の大きさ・読みやすさ
- 3－3 配置・全体の構成
- 3－4 板書のタイミング
- 3－5 視覚補助の適切さ（見やすさ・情報量：適切 / 不足 / 過多）

4. 教師の動き

- 4－1 声の大きさ
- 4－2 話す速さ・滑らかさ（速すぎ・つかえすぎ・不要な沈黙など）
- 4－3 立ち位置・からだの向き
- 4－4 表情・視線
- 4－5 練習の運営
 - 4－5－1 手順（全体－個人－全体）
 - 4－5－2 段階を踏んでいるか（単語から文へ・教師の指導から生徒の活動へ）
 - 4－5－3 生徒の反応を観察しているか
- 4－6 生徒とのやりとり
 - 4－6－1 生徒とのやりとりが十分行われているか
 - 4－6－1 ほめ言葉
 - 4－6－2 誤答・無答への対応

5. その他

3.2 授業者の問題点 ― チェックリストに即して

上記チェックリストの各項目について、詳細に論ずる余裕はない。ここでは、チェックリストに基づいて、模擬授業でよく見られる授業者の特徴や問題点を抽出し、重要と思われる項目について記述する。履修者が、中学校・高等学校で生徒として受けてきた授業が、無意識のうちに、あるいは意識的に反映されている部分があると推測される。以下、[] に示された番号は、上記のチェックリストの番号に対応している。

（１）「１．授業組み立ての原則（心得五ヶ条）」にかかわる問題

[1-1] 新出語句を音声で示す前に、黙って板書する。

[1-2] 新出語句の意味を生徒に理解させる前に、いきなり発音練習をする。

[1-4] ある英文を生徒に定着させようとする場合に、教師が常にモデルを示し、どの段階になっても、生徒が自立して発話させるように仕向けない。

[1-5] 練習のさせ方に統一性がない。全体のための練習で済ませたり、いきなり個人指名したりする。

(2) 「2. 英語の正確さ」にかかわる問題

英語を教える上で、これがもっとも基本となるものである。履修者の英語力にはばらつきがあるが、傾向としてよく見られるものとして、以下のような項目が挙げられる。

[2-1] 単数・複数に不注意であったり、呼応する動詞の形や時制が不正確であったりする。また、冠詞の使用に混乱が見られる。たとえば、以下のような教材の例では、定冠詞・不定冠詞に混乱や脱落が見られることが多い（下線部）。

This is the Sphinx in Greek myth. It is a winged monster with the body of a lion and the head of a woman.

[2-3] 個々の音素についてここでは論じないが、「形容詞＋名詞」の連結、たとえば、a small boy を、中立的な文脈にもかかわらず ● ●のように形容詞に明らかなストレスを置いて発音するケースが多い。また、文レベルになると、英語らしいリズムがとれないことが多い。

(3) 「3. 板書の見やすさ・わかりやすさ」にかかわる問題

[3-1] ピクチャーカードが、クラスサイズとの関係からみると小さい。授業では、基本 A3 判と指導しているが、A4 判で済ませ、後ろの席の生徒からはよく見えないことがある。

[3-2] 黒板に英語の文字をきれいに書くのは、現場の教師にとっても決してやさしいことではないが、そもそも文字が雑で読みにくい。文字の大きさ、個々の文字の高さに無頓着である。

[3-5] 手描きのピクチャーカードで、絵の輪郭線が細く、後ろの生徒からはよく見えない。手元で見ればきれいな絵だが、線や色が薄く、やはり後ろの生徒からはよく見えない。カラフルな写真を使用するが、情報過多でかえってわかりにくい。

(4) 「4. 教師の動き」にかかわる問題

[4-3] 立ち位置が悪く、自分の体で板書を隠してしまう。板書の際、生徒に完全に背を向ける。

[4-4] 台本が頭に入っていないため、生徒ではなく、教卓に置いた台本を見ている時間が長い。

[4-5-2] 単語→句→文といった段階を踏んだ指導が不十分である。

[4-5-3] 前出の [4-4] とも関連するが、ここで指摘したいのは、生徒に発音させる際、授業者が生徒と一緒に声を出す、という現象である。現場の教員にもよく見られ、生徒を励まし、引っ張っていかうとする気持ちの表れかとは思う。しかし、生徒に発音させる場面での教師の役割は、それをモニターすることである。生徒と一緒に発音したのでは、生徒の声が聞き取れない。

[4-6-1] 自分のセリフを言うのが精いっぱい、生徒とのやりとりが不十分となり、一人芝居に近い。

[4-6-1] 生徒の答えに対して、褒め言葉や修正などのフィードバックが不十分。

[4-6-2] 思いがけない生徒の反応に対して、臨機応変の対応はやはりむずかしい。

3.3 その他の問題点 — 文脈の重要性

チェックリストには「5. その他」の項目を設けてある。さらに必要な要素があれば、今後新

たに組み込む可能性があることを示している。現時点で、具体的にリストに組み込めないものとして、「文脈」の問題がある。大きく言えば、チェックリストの「0. 大前提」に関わる問題であろう。

新出語句を導入する際、新出語句のみを取り出して、文脈から切り離して説明しようとする傾向が見られる。これは実は重大な問題である。教材がわずか20語程度の英文とは言え、そこには文脈がある。文脈に支えられて語句の意味は具体的に、そして明確になる。たとえば、次のような教材がある。下線部は新出語句という想定である。

Mrs. Green is a doctor's wife. She has a nice neighbor, Mrs. Jones. They often do each other's shopping.

この中で、新出語句として、each other が挙げられている。こちらの意図としては、do each other's shopping が具体的にどのようなことなのかを、生徒に理解させるような進め方を期待している。これを each other の部分だけを抜き出して、無理に英語で抽象的に説明しようとするので、生徒役にも伝わらない。実は教師役の学生も「お互いの買い物をする」といった日本語に頭の中で置き換えただけで、それが具体的にどういうことなのかは考えないという、思考停止状態に陥っている可能性も高い。これはこれで大きな問題であるが、話を本筋にもどす。ここでは、たとえば、ある日、グリーンさんが忙しくて買い物に行けないので、ジョーンズさんに頼んで、パンを買ってきてもらった。また、別の日には、ジョーンズさんが病気で買い物に行けないので、グリーンさんにリンゴを買ってきてもらった、というような具体的な内容を例として挙げる。そういう状況が、do each other's shopping ということである。絵なども活用すれば、中学校レベルの英語で、十分わかりやすく具体的に説明することが可能である。

原因として考えられるのは、学生が、これまでの英語の授業で受けてきた指導である。中学校などでよく見られるのが、新教材に入る際に、まず「新出単語の導入」と称して、単語カードを提示し、発音練習し、カードの裏の日本語訳を示す、というやり方である。今回の例にあてはめると、カードに each other と書かれており、裏側に日本語で「お互い」と書かれている。これを生徒に示して、新出語句の「導入」は済み、という考え方である。これを踏まえて、教科書本文の理解へと進む。この展開のしかたの根底にあるのは、単語が独立して明確な意味(往々にして、1対1対応の発想による日本語訳)を持ち、それが、文や文章の中にはめ込まれている、という捉え方である。この感覚を長年にわたって刷り込まれてきた結果、教える立場に立った時に、上記のような発想で授業を進めようとするのではないだろうか。単語は文脈に支えられて初めて意味が明らかになり、具体的なイメージを持つ、という捉え方ができない。例えば、comfortable という語は、もちろん、共通する核となる意味を持っているが、a comfortable house と a comfortable chair ではその具体的なイメージは当然異なるし、I don't feel comfortable in her presence. とあれば、comfortable のイメージはさらに異なる。それを、1語1訳方式で事足りりとするのは、外国語を教える（あるいは学ぶ）上で、根本的で大きな問題である。

4. 「英語科教育法」運営上の課題

ここまで述べてきた「英語科教育法」の授業の進め方にはさまざまな課題もある。それらについて検討する。

(1) 履修者数の問題

このような授業の進め方で、履修者全員が、前期・後期で5～10分程度の模擬授業の教師役を2回は体験することを念頭に置くと、履修者数は30名が上限である。近年、中高英語免許取得希望者が増加傾向にあり、これがなかなか困難になっている。正規の授業時間以外にも、模擬授業の時間をとって実施したこともあるが、今後どうするかは課題である。

(2) 授業の導入部分しか扱えない

履修者全員が教師役を体験することを重視しているので、授業のうち、新教材の導入部分しか扱えない。1単位時間の授業については、新教材の導入の前にどのような活動を行うか、また、導入の後、どのように展開するのも重要な問題である。この点について、履修者に解説するだけではやはり不十分である。参考として、Oral Introduction を核とした1時間の授業の展開例を、小菅(2017)から一部修正して以下に示す。1時間の授業でもこれだけの要素があるが、「英語科教育法」の模擬授業で扱うのは、下のⅢ. Presentation of New Material の部分だけということになる。

I. Warm-up

II. Review

Ⅲ. Presentation of New Material

Oral Introduction (生徒との英語でのやりとりによる新教材の導入)

(Model Reading) (教科書を開く。ここで教師が音読のモデルを示してもよい)

IV. Explanation (補足説明・日本語可。教材の100%理解を図る)

V. Reading Aloud (音声と文字を結びつける・理解した内容の音声化。Outputの第一歩)

(Model Reading) (この段階で、教師が音読のモデルを示す、という考え方もある)

Chorus Reading

Buzz Reading

Individual Reading (→ Read & Look Up → Recitation)

VI. Story Retelling

Chorus

Pair Work

Individual (Presentation by Students)

VII. Writing

(3) 指導案の書き方

1時間の授業の指導案の書き方についても、あまり触れられない。学生からの要望もあるが、

4 年次の「教育実習」の事前指導で、必要最低限の内容はカバーするようにしている。

（４）英語科教育法で扱うべき広範なトピックを扱いきれない

学生には、「英語科教育法」に関わる内容を包括的に論じたテキストを持たせているが、授業ではほとんど扱えず、家庭学習、レポート提出という形でカバーしている。模擬授業の体験から、こちらが学生に伝えたいこと、学生に気づいてもらいたいことは山ほどある。しかしながら、ほとんど模擬授業だけで終わってしまう「英語科教育法」は改善の余地がある。

（５）教師としての英語力

これは、教科教育の科目だけでカバーできる問題ではないが、模擬授業を通して見えてくる学生の英語力の問題がある。将来、小学校や中学校・高等学校で、児童・生徒を指導する立場に立つことを考えると、教師が児童・生徒に与えるインプットの質は重要な問題である。TOEIC で高いスコアを取っていても、英語教師に求められる英語力は、それとは異なる部分がある。特に、基本的な部分での正確さ（accuracy）の重要性を痛感する。英語教員養成の全体に関わる問題である。

5. おわりに

週 1 コマ（90 分）という限られた時間の中で、年々増加傾向の履修者に「英語科教育法」という授業で何を伝えるべきか、常に難しい問題である。実践的な英語の指導技術に加え、それを支えるための、教師に必要とされる確かな英語力の養成、そして、それらを小手先のものとしてしまわないためには、根底にある「ことばを教える・学ぶこと」に対する深い理解と認識が重要である。さらに、現場を取り巻く、学習指導要領をはじめとする教育行政や教育環境の理解、同時にそれらを批判的に見ることのできる洞察力等々、際限がない。優先順位を付け、取捨選択しながら、地道に改善を図っていきたい。

参考文献

- 語学教育研究所編（1988）『英語指導技術再検討』大修館書店
- 語学教育研究所編（2008）『語研ブックレット 2 指導手順再検討』財団法人語学教育研究所
- 語学教育研究所編（2014）『英語指導技術 Q & A』一般財団法人 語学教育研究所
- 小菅敦子（2018）「第 5 研究グループ 授業研究」『語研ジャーナル第 17 号』pp.89-91
- 小菅和也（2010）「音声重視した英語授業の考え方—基本理念と指導技術—」『語研ジャーナル第 9 号』pp.39-46 一般財団法人語学教育研究所
- 小菅和也（2017）「『英語の授業は英語で』の考え方」『武蔵野教育学論集第 3 号』pp.57-67 武蔵野大学
- 土屋澄男編著（2011）『新編英語科教育法入門』研究社